

< 離島探検の基礎的研究 >

研究期間 平成 29 年度

研究代表者名 松尾晋一

I. 研究課題の意義、成果目標

延宝 3 年（1675）、幕府は長崎代官末次平蔵に無人島（小笠原諸島）へ船を出すことを命じた。島の存在は当時知られていたものの、まさしく探検であった。

昨年度の学長裁量費を用いた調査で、当時の地図が本光寺（島原市）に所蔵されていることを確認できたものの、それがオリジナルか、それとも複製なのか、こうしたこともわかっていない。これらの検証もふくめ、この地図を手がかりとして、当時の離島調査を検証する。踏査をふまえた地図、および関係史料の分析から当時の離島調査の実態を解明し、自然科学や歴史的な意義とともに、今日的な離島研究に繋がる要素を抽出して成果を教育現場で活かしたいと考えている。

II. 研究の学術的・社会的な特色・独創的な点

現在島原市本光寺所蔵の地図は、目録レベルでどこの島であるのかでさえ特定されていない。この点を比定することだけでも、学術的な意義はある。類似の地図が長崎歴史文化博物館にあり、小笠原諸島であることはほぼ間違いないが、長崎歴史文化博物館に記されていない動・植物の情報がかなりあり、新出資料をもとに日本初の無人島探検の歴史的意義を考えることが学術的な特色である。

小笠原諸島の生態を知れる最古の情報ということになり、社会的なインパクトは大きい。末次平蔵の小笠原探検は、日本人による探検史の原点であり、その再定義を歴史学だけではなく、民俗学や社会学、自然科学の諸分野の成果も取り込みながら分析するところが独創的な点である。

III. 研究内容

本光寺所蔵「無人島之図」に関係する史料の収集を国立公文書館や長崎歴史文化博物館などで行い、無人島探検の確認と同類の絵図との比較分析を行った。また東京都小笠原村役場などを訪問して、延宝 3 年の無人島探検に関する研究動向の確認と本光寺所蔵「無人島之図」の記載内容に関する情報交換を行った。

分析の詳細については下記の成果を確認いただきたいが、これまで知られている秋岡武次郎氏がいう無人島精図に記載されていない距離や地形以外の動植物に関する情報が、「無人島之図」に多く含まれていることが明らかになった。動植物に関してはできる範囲での確認作業を行ったが、専門的な知識が必要であることを痛感した。今後それぞれの専

門家に分析していただくことが望まれるため、くずし字の翻刻を含む史料紹介として成果をまとめた。

なお、当該期の東アジアは、明清交替に伴う変動期で国家間の関係再編が見られるなかで、幕府は貿易と、異国船、異国人の掌握を試みていったⁱⁱ。しかし幕府が、外の世界との接触に決して消極的な姿勢で臨んでいたものでないことを延宝期の「無人島」探検が証明していると理解すべきであろう。

IV. 研究報告と成果

- ・松尾晋一「島原城主松平家と「長崎御用」「歴史と文化の友好交流シンポジウム」愛知県幸田町、2017 年 11 月（口頭報告）。
- ・松尾晋一「本光寺所蔵「無人島之図」『長崎市長崎学研究所紀要 長崎学』第 2 号、2018 年 3 月。

〔追記〕

平成 30 年は、小笠原諸島が日本に返還されて 50 周年を迎える。こうした時に偶然にも現在の父島・母島が描かれた絵図の分析をできた。今後本研究で得た知見に関して情報発信することに努めるが、長崎県民には広く東京都小笠原との関係があることを知っていただきたいと思っている。

ⁱ 秋岡武次郎「小笠原諸島発見史の基本資料、地図について（一）」『海事史研究』一、1963 年。秋岡武次郎編著『日本古地図集成』（鹿島研究所出版会、1971 年）所収の『日本地図作成史』に秋岡武次郎の序文がある。その第六編第三章「日本本土沿海の諸島嶼の日本領経過」第一節「小笠原諸島発見史の基本資料、地図について」。

ⁱⁱ 松尾晋一「幕府対外政策と東アジア再編：異国船問題の政策継承」『歴史学研究』九二四号、二〇一四年。